

秋田県の話題

大館 枝豆の産地から全国へ宅配便の出発式

全国有数の出荷量を誇る秋田県産の枝豆をPRしようと、8月5日朝、大館市で郵便局の宅配便で送るサービスの出発式が開かれました。秋田県は枝豆の全国有数の産地で、県内の郵便局が生産者などと協力して首都圏などに向けて宅配便で送るサービスを毎年行っています。



へ枝豆を花束のようにした「豆束」が手渡されました。

そして、テープカットのあと、収穫されたばかりの枝豆の品種「味風香」およそ50キロを積んだ第1便の軽トラックが、出発していきましました。郵便局によりますと、大館産の枝豆の申し込みは、これまでにおよそ180件あったということです。大館市で枝豆を生産している農業法人によりますと、こしは4月下旬からの長雨で種まきが2週間ほど遅れ、成長の期間が短くなつてしまつたことに加え、夏場の雨不足で枯れた枝豆もあり、収穫量は去年に比べて2割ほど減る見通しだということです。枝豆を生産する農業法人アグリ川田の川田将平社長は「味は、良いものになったと思う」とのお話です。

横手のスイカ 「あきた夏丸」

横手市で特産のスイカの出荷が本格的に始まったのにあわせ、スイカの生産者らが8月5日県庁を訪れ、出荷状況を報告しました。

横手市は県内の生産量のおよそ8割を占めるスイカの産地で、「あきた夏丸」や、小玉スイカの「あきた夏丸チツチェ」といった品種の栽培が盛んです。

今年度のスイカの出荷が先月から本格的に始まったのにあわせ、横手市のスイカの生産者らが県庁を訪れ、鈴木知事と面会しました。

この中で、「JA秋田ふるさと西瓜部会」の佐藤保部会長が、こしは7月の気温が高く日照時間も多かったため、糖度が高くシャリシャリとした食感の優れたスイカを出荷できていると報告しました。



その後、切り分けられたスイカを試食した鈴木知事は「甘いですね。ジューシーなのに濃厚というかんじで大変おいしいです」と話していました。「JA秋田ふるさと西瓜部会」によりますと、出荷は9月上旬まで行われるということで、出荷量4500トン、販売額12億円を目指すという事です。「こしは特に暑いので熱中症対策としてスイカにかぶりついていただいている消費者の皆さんの顔が見えるようです」とのこと。夕方は涼みながら秋田のスイカを食べたいですね。

金足農業野球部が甲子園へ

夏の全国高校野球が8月5日甲子園球場で開幕し、2年連続8回目の出場となる金足農業の選手たちも力強く入場行進しました。

ことしで107回目を迎える夏の全国高校野球はこし、暑さ対策など選手の負担を軽減しようと史上初めて午後4時から開会式が実施されました。

開会式では去年優勝した京都国際高校を先頭に地方大会を勝ち抜いた49の代表校の選手たちが入場行進しました。

このうち、2年連続8回目の出場となる金足農業の選手たちもキャプテンの佐藤晃真選手を先頭に胸を張って足並みをそろえ、力強く入場行進しました。

大会は3日間の休養日を含めて去年より1日長い18日間の日程で行われ、金足農業は6日、大会2日目の第3試合で沖縄尚学高校と対戦しました。2年連続8度目の出場を果たした秋田代表の金足農業は6日、沖縄尚学に0対1で惜敗し、1回戦で姿を消しました。「金農旋風」の再現はかなわなかったが、試合後には観客席から大きなねぎらいの拍手が巻き起こった。高橋コーチは「また甲子園に連れてきてもらい、選手たちには感謝しかない。来年ここに帰れるように鍛え直したい」と力を込めた。



“20歳のつどい” 式典の出席対象人数 過去最低を更新

県内の自治体が実施する「20歳のつどい」などの式典への出席の対象となる人の数が、今年度8083人となり、昨年度よりもおよそ200人減り、過去最低を更新することが県教育庁のまとめでわかりました。県教育庁のまとめによりますと、「20歳のつどい」や「成人式」といった自治体を実施する式典への出席の対象となる人の数は今年度8083人となりました。

昨年度と比べるとおよそ200人減少し、過去最低を更新しました。県内では式典への出席対象となる年齢にはばらつきがあり、

▼21歳になる学年を対象とするのが23市町村、

▼20歳になる学年を対象とするのが秋田市と由利本荘市の2つの市となつています。

このうち、

▼横手市など20市町村では今年8月に、

▼秋田市など5つの市では式典を来年1月に実施する予定です。

また、式典の名称について



▼「20歳のつどい」などとしているのが20市町村、

▼「成人式」としているのが5市町村だということです。

成人年齢は、令和4年に20歳から18歳に引き下げられましたが、式典への出席の対象年齢を変更した自治体は県内では、これまでのところないということです。